

●はじめに

私の勤める岐阜県立森林文化アカデミーには、専修教育、短期技術、生涯学習の3部門があり、専修教育には少人数で専門に特化した4講座で個別に学ぶクリエイター科と、一般教養から林業の専門基礎を学ぶエンジニア科があります。

専修教育の中でもクリエイター科は、スギ・ヒノキ人工林や広葉樹などの天然生林を活かしながら森林整備をすすめる人材を育成する「林業再生講座」、森林から得られる地域資源を活かし、快適な住環境を提案しながら山と町をつなぐ人材を育成する「木造建築講座」、地域材利用を通して地域の文化や人、風土を生かし、森と人、森とものをつなぐ人材を育成する「ものづくり講座」、山村の生活文化や持続可能な暮らしを通して山村の地域活性化に寄与できる人材や自然学校などでのインタープリターを育成する「山村づくり講座」が設定されています。

また短期技術研修は森林や林業に付随する分野の専門家のレベルアップを目指す研修を、生涯学習は木と人のつながり、木と森の

今月号から個性豊かな森林文化アカデミー教員が「森林と人を活かす知恵」をテーマに、様々な視点ですぐに取り組める活動のヒントや考えるための基礎知識を紹介します。
1回目となる今月は、森林文化アカデミーの目指す姿を、取組みを交えながら紹介します。

活かされる人づくり、地域づくり、山づくりを目指す

岐阜県立森林文化アカデミー ●川尻 秀樹

つながり、人と人のつながりを目指す講座を実施しており、学校全体として山や森林、地域、人づくりに積極的に取り組んでいます。

●東日本大震災では

震災前には風景の一つにしか見られていなかった海岸防災林。3・11東日本大震災では、この「森」が大きな役割を果たしたことをご存知ですか？

17世紀以降、日本では強風や飛砂、潮害などを防ぐ目的で海岸に森を造成してきました。地震とともに予想をはるかに超える大きな津波が襲った時、青森県から千葉県にかけての太平洋岸にある253ヶ所の1,718haにおよぶ海岸防災林は、津波エネルギーの減衰、漂流物の捕捉、津波到着時間の遅延に大きく役立ち、減災に貢献しました。

そればかりか、地震で孤立した地区の人々は、なかなか救援物資が届かず飲料水も寒さをしのぐものもない中で、森から湧き出る沢水を飲み、枯れた木々を燃やして命をつない

だのです。東北の人々にとって、それまで当たり前のように思っていた「森」の存在。先人たちの知恵でつくり上げた森と森の恵みが人の命をつないだのです。

●知恵を伝える

みなさんは「知恵」とはなんだと思いますか？知恵は経験を通して知り得る知識をつなぎ、物事に筋道を立てて、少しでも簡単にしたり、便利にしたりする生きた能力です。

知恵を伝えるといえば、Mercedes-BenzやBMWに代表される自動車産業や、一昔前から切れ味抜群なゾーリングン刃物、ほかにビールやソーセージというドイツ製品の背後には、職人の知恵を伝えるマイスター制度があります。

マイスターとはまだ充分な知識や技術のない者に、単なる技だけではなく、経験を通して知恵を伝授する指導者で、日本語では「親方」とか「名人」と訳されています。公的な試験に合格したマイスターは、技術だけでなく

く生活のあらゆる面で徒弟（実習生）を教育しますが、日本では多くの知恵は徒弟制の下で親方から盗むのが常識とされてきました。しかし森林文化アカデミーのように、森林や木材、人とのつながりが一体化された学校の中で実践的な教育活動を実施すれば、より短時間に「知恵」を伝えられるのではないかと考えています。

●社会の仕組みづくり

最近の生活では、あらゆる場面で木材が使われなくなりました。森の活かし方、森を活かす人づくり、人から人へ伝える森の文化も希薄になってしまいました。

森を活かす社会を作り出すには、様々なレベルでの働きかけと知恵の伝承が重要であり、その第一歩は「木育」であり、最終的には教員だけでなくあらゆる熟練者や達人たちの協力も得ながら、山を育て、伐り、使い、再び豊かな山を育てる担い手を教育する必要があります。

今こそ、木材を生産する一次産業、それを製材し加工する二次産業、家などを販売する三次産業が有機的につながり、互いに協力することが重要であり、そんな社会の仕組みを考えていける人材を森林文化アカデミーで育てできればと考えています。



▲加子母優良材生産クラブによる知恵の伝授